国　　語

1　国語科学習指導の改善

(1)　学習指導の改善の視点

国語科の学習指導の改善に当たっては、新しい学習指導要領における教科・科目の目標で次のような点が重視されていることを十分踏まえる必要がある。

ア　互いの立場や考えを尊重して、言葉で伝え合う力を育成すること。

イ　社会人として必要とされる言語能力を確実に育成すること。

特に、自分の考えをもち、論理的に意見を述べる能力、目的や場面に応じて適切に表現する能力、目的に応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ態度を育てること。

ウ　文学的な文章の読解に偏らず、様々な文章を読んだり、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てたりすること。

また、今回の具体的事項の改訂において、領域構成が変更されていることや言語活動例が示されていることに留意して、目標に示されたねらいが十分達成できるよう、国語科全体の連携、協力の下に、指導計画の作成や指導方法を工夫することが大切である。

さらに、生徒が自分の言葉に関心や理解を深め、言葉を通して好ましい人間関係を形成、維持していくことができるよう、国語の授業における言語能力育成の指導に努めるとともに、国語科の指導を中心としながらも、他教科等との適切な連携のもと、学校の全教育活動を通じて言葉の指導が行われ、学校生活全体における言語環境が整えられていくようにすることが大切である。

(2)　効果的な学習指導

新学習指導要領において改善が図られている事項を踏まえて、効果的な学習指導を行うためには、特に、次の点に留意して授業改善を進めることが大切である。

ア　各領域の調和のとれた学習指導

(ア)　総合的な言語能力を伸ばすため、文章や作品等の読解指導に偏らないよう、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」の各領域の学習が調和的に行われるようにする必要がある。

(イ)　「話すこと・聞くこと」の領域においては、論理的に意見を述べたり、相手の立場や考えを尊重して話し合ったりする態度や能力の育成を重視して、「話すこと・聞くこと」の学習を、音声言語の学習として一体的に行うことが大切である。

(ウ)　「書くこと」の領域においては、目的や場面などに応じて適切に表現する能力の育成を重視して、手紙や通知、案内、紹介などの様々な文章を書くように配慮する必要がある。

(エ)　「読むこと」の領域においては、目的に応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ態度の育成を重視するとともに、教材についても文学的な文章に偏らないようにすることが大切である。

イ　「国語総合」における「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」の学習指導

(ア)　高等学校国語の目標を全面的に受けた基礎的な科目である「国語総合」における

指導は、社会人として必要とされる言語能力の基礎的な部分を形成するとともに、他の領域や科目、総合的な学習の時間などの学習に生きて働くものとなるように配慮する必要がある。

(イ) 小・中学校国語の指導時数及び指導内容を踏まえつつ、意図的・計画的に指導計画を作成し、「話すこと・聞くこと」の指導に15単位時間程度、「書くこと」の指導に30単位時間程度の指導時数を確保し、それぞれの領域において独立した単元等を設定するなど、指導の工夫を図る必要がある。

ウ 言語活動例を活用した学習指導

(ア) 言語活動例に示された各事項は、指導のねらいを達成するための、いわば手段としての位置付けがなされていることに留意する必要がある。

例えば、「国語総合」の「読むこと」の言語活動例には、文章に表れたものの見方や考え方などを読み取り、それらについて話し合うことが示されているが、ここでの話し合う活動は、話し合う力を直接的に育てるために設定されているというよりも、読むことの能力を伸ばすための手段として位置付けられているものである。

授業では、どのような言語能力を育てるために、どのような言語活動を行うことが効果的であるかを十分検討して、言語活動を工夫することが大切である。

(イ) 「国語総合」の各領域の言語活動例においては、「話すこと・聞くこと」の「課題について調べたり考えたりしたことを基にして、話合いや討論などを行うこと。」のように、課題探究的な言語活動を行うことが示されており、自ら学び自ら考える力を身に付けるための学習を進めるという観点から、積極的に取り組む必要がある。

エ 古典に親しむ態度を育成する学習指導

(ア) 今回の改訂では、古典については、生涯にわたって古典に親しむ態度の育成が一層重視されていることから、詳細な文法指導、語句の意味や文の解釈に偏らないよう、古典を読んで興味をもったことについて調べる学習などを取り入れて、生徒の主体的な学習活動を工夫をする必要がある。

(イ) 学習指導要領の「古典」の内容の取扱いでは、「話すこと・聞くこと及び書くことの言語活動を効果的に取り入れる」よう求められており、例えば、音読、朗読、暗唱を取り入れたり、古典に表れた思想や感情の特徴、表現上の特色などについて話し合ったり、あるいは、古典の言葉と現代の言葉を比較対照するなどの言語活動を工夫することが大切である。

オ 読書力を高め、情報を活用する能力を育てる学習指導

(ア) 国語科の学習指導や読書指導を通して、意図的、計画的な学校図書館の利用を図り、読書意欲を喚起し読書力を高めるよう工夫することが必要である。

(イ) 学校図書館の諸機能を活用し、図書館の資料等から必要な情報を検索、収集するなどの学習活動を通して、情報を活用する能力の育成を図る必要がある。

(ウ) 音声言語やビデオなど映像による種々の教材、また、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を適宜活用して、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」の全般にわたって学習の効果を高めるよう工夫する必要がある。

2　評価の工夫

(1)　評価の基本的な考え方

新学習指導要領における国語科の改善が十分に効果を上げるためには、学習指導の改善とともに評価の改善が図られなければならない。特に、指導や学習に生きる評価の在り方を一層工夫する必要がある。

国語科の評価の観点及びその趣旨は、新学習指導要領における目標、内容の改訂などを考慮して、次のように改められている。

【現行】

観　点	趣　旨
関心・意欲・態度	国語や言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図り、進んで表現したり理解したりしようとする。
表現の能力	自分の考えをまとめたり深めたりして、相手や目的に応じて筋道を立て、表現を工夫して話したり文章に書いたりする。
理解の能力	話し手や書き手の考えに即して内容を正確にとらえ、自分の考えを深めたり発展させたりしながら話や文章を的確に理解する。
知識・理解	表現と理解に役立てるための音声、文法、表記、語句、語彙、漢字等を理解し、知識を身に付けている。

（平成５年７月29日文部省初等中等教育局長通知）

【改訂】

観　点	趣　旨
関心・意欲・態度	国語や言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図り、進んで表現したり理解したりするとともに、伝え合おうとする。
話す・聞く能力	自分の考えをまとめたり深めたりして、目的や場面に応じ、筋道を立てて話したり的確に聞き取ったりする。
書く能力	自分の考えをまとめたり深めたりして、相手や目的に応じ、筋道を立てて適切に文章に書く。
読む能力	自分の考えを深めたり発展させたりしながら、目的に応じて様々な文章を的確に読み取ったり読書に親しんだりする。
知識・理解	表現と理解に役立てるための音声、文法、表記、語句、語彙、漢字等を理解し、知識を身に付けている。

（平成13年４月27日文部科学省初等中等教育局長通知）

国語科の評価は、評価の観点及びその趣旨を踏まえ、科目の目標や内容に応じてさらに具体的な観点や規準を設定したり重点を設定したりしながら行う必要がある。その際、今回新たに示された言語活動例を活用する視点から、指導内容と密接に関連した具体的な言語活動を通しての指導を行い、その評価が十分行われるようにする必要がある。

(2)　評価における配慮事項

国語科の評価は、示された観点及び趣旨に沿って工夫・改善を図ることがもっとも大切である。特に、改善に当たって高等学校の国語科に求められている、社会人として必要な言語能力の基礎を確実に育成することを目指して、各科目の目標や各学校での指導内容に即した評価規準を適切に設定していくことが求められている。

ア　「関心・意欲・態度」の評価

観点は現行と同じであるが、教科目標に「伝え合う力を高める」ことを位置づけたことに対応して、趣旨として「伝え合おうとする」ことが示されている。評価に当たっては、国語に対して興味・関心があり、国語を大切にし、意欲をもって学習する態度を示しているかをみるとともに、伝え合う力の育成という視点からも、生徒の学習状況をとらえる必要がある。

また、「関心・意欲・態度」は、他の四つの観点すべてと密接に関連しており、学習の全過程において、この観点からの指導と評価が適切に行われる必要がある。

イ　「話す・聞く能力」の評価

新設の観点である。趣旨として示された「自分の考えをまとめたり深めたりして」、「筋道を立て」においては、個性の伸長を図り、思考力や論理性を高めることが求められている。「聞く能力」については、相手の話を的確に聞き取り、理解することが求

められている。評価に当たっては、自分の考えをもち、相手の立場や考えなどを尊重して、論理的に意見を述べているか、目的や場面などに応じて的確に話したり聞いたりしているかという視点に立つことが必要となる。

例えば、「国語表現Ⅰ」での、自分の考えを明確にして、スピーチ、発表、討論などを行うという言語活動を通した学習において、相手の立場や考えを尊重し、目的や場面に応じて、話したり聞き取ったりしているかなどを評価することが考えられる。

ウ　「書くこと」の評価

新設の観点である。趣旨として示された「自分の考えをまとめたり深めたりして」、「筋道を立て」は、「話す・聞く能力」の趣旨と同じであり、個性の伸長を図るとともに、思考力や論理性を高めながら、文章表現力を育成することや「相手や目的に応じ」た明確な意図を持った文章表現力が求められている。評価に当たっては、様々な情報を基に自分の考えをまとめるとともに、立場を明らかにして書いているか、相手や目的などに応じて論理的で効果的な文章を書くことができているかという視点に立つことが必要となる。

例えば、「国語総合」での、題材を選んで考えをまとめ、書く順序を工夫して説明や意見を書くという言語活動を通した学習において、課題に対する自分の立場、伝えたい事実や事柄を明確にし、文章の内容が相手に効果的に伝わるように論理の展開を工夫しているかなどを評価することが考えられる。

エ　「読むこと」の評価

新設の観点である。趣旨に示されている「自分の考えを深めたり発展させたりしながら」は、「読む能力」においても、個性の伸長や、思考力を高めることを重視したものである。「目的に応じて様々な文章を的確に」においては、読み手の主体的な読みを重視するとともに、論理的な文章や文学的な文章だけにとらわれず、それら以外の様々な種類の文章を読むことが求められている。また、読書に親しむことも新たに求められている。評価に当たっては、目的や意図に応じて様々な文章の内容を的確に読み取っているか、読むことを通してものの見方や考え方を深めたり発展させたりしているかという視点に立つことが必要となる。

例えば、「現代文」での、文章の理解を深め、興味・関心を広げるために、関連する文章を読んだり創作的な活動を行ったりするという言語活動を通した学習において、目的をもって様々な文章を読み、必要な情報を集め自分の表現に役立てているかなどを評価することが考えられる。

オ　「知識・理解」の評価

現行と同じ観点である。「表現と理解に役立てるため」の基礎的な事項としての「音声、文法、表記、語句、語彙、漢字等」は、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」の指導の中で深めることが求められている。評価に当たっては、表現や理解に生かすことのできる力をつけているかという視点に立つことが必要となる。

例えば、「古典」での、古典に表れた思想や感情の特徴、表現上の特色などについて話し合うという言語活動を通した学習において、表現上の特色を理解し、言語感覚を磨き、表現を豊かにすることができているかなどを評価することが考えられる。

3　学習指導案の作成

言語活動を効果的に取り入れた「国語総合」（第１学年）の学習指導案

『水の東西』（山崎正和）の学習において、関連する文章を読み、比較することにより、読みを深めるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりする。

○指導計画の全体計画

時限	目　　標	学　習　活　動
1	・全体の要旨をまとめることができる。	・通読後、各段落の要旨を簡単にまとめる。
2	・第１、２段落の要点をつかむことができる。	・第１、２段落の論理の展開をとらえる。
3	・第３、４段落の要点をつかむことができる。	・第３、４段落の論理の展開をとらえる。
4	（本時の目標）	（本時の学習活動）

○本時の目標　・関連する文章を読み、日本人と西洋人の感じ方の違いを比べ、ものの見方や考え方を広げたり深めたりすることができる。

指導段階	形態	指導のねらい	学習活動（○）・指導計画（・）	言語活動	評価の観点
導入 10分	一斉	・「水の東西」に関連する文章を読み、大まかな要旨を把握する。	○池田摩耶子の文章「虫が鳴く」※（部分）を読み、「虫の音」に対する日本人と西洋人の感じ方の違いを大まかに確かめる。 ・日本人と西洋人の感じ方の違いがわかるように、注意して読ませる。		・「水の東西」に関連する文章の大まかな要旨を理解することができたか。 （自己評価）
展開 35分	一斉	・「水の東西」に関連する文章を読んで、日本人と西洋人の感じ方の違いを読み取らせる。	○「虫が鳴く」を読んで、次の設問について考える。 ①アメリカ人にとって「虫」というと、「はえ」や「のみ」のことであるのはなぜか。 ②アメリカ人は、なぜ「虫の音」を聞き分ける感覚が全く磨かれていないのか。 ・質問により生徒から意見を引き出し、それらの意見について教師がコメントをしながらまとめ、「虫の音」に対する日本人と西洋人の考え方の違いを明らかにする。	・文章に表れたものの見方や考え方を読み比べる。	・日本人と西洋人の感じ方の違いを読み取ることができたか。 （自己評価）
	グループ	・日本人と西洋人の感じ方の違いについて、「水の東西」と「虫が鳴く」を比較することにより理解を深めさせる。	○グループに分かれ、話し合いの準備をする。 ・全員が話合いに参加できるように、４～６人に分けるなど、グループの人数を調整する。	・文章に表れたものの見方や考え方について話し合う。	・日本人と西洋人の感じ方が異なることについて理解を深めることができたか。 （自己評価）
		・「水の東西」に即して、読み取りを深めることができるように話し合い、発表させる。	○「水の東西」と「虫が鳴く」を読み比べ、各グループごとに次の課題について話し合い、その結果をグループごとにまとめ、発表する。 ・課題：「『水の東西』と『虫が鳴く』に共通して取り上げられている日本人と西洋人の特徴を比較しよう」 ・二つの文章に共通して取り上げられている日本人と西洋人の特徴を各グループごとにまとめる。 ・各グループの発表。 ・教師の助言により、同じ主張は集約し、異なる主張は対立点を明らかにする。	・課題についてまとめて発表する。	・自分の意見を整理して話すことができたか。 （自己評価） ・発表を注意して聞くことができたか。 （自己評価） ・発表の内容はわかりやすかったか。 （相互評価）
まとめ 5分	一斉	・日本人と西洋人の感じ方の違いを踏まえ、東西の文化の違いについて考えさせる。	○日本人と西洋人が、水と同じく音についてもその感じ方が異なるのは、東西の文化の違いによるものであることをグループの発表の内容を踏まえて解説する。 ・第１～３時限を踏まえ、水や音に対する感じ方の違いは、文化の違いによるものであることを理解させる。 ・二つの文章を比べることによって、「水の東西」の理解を一層深めさせる。		・日本と西洋の文化の違いについて理解が深まったか。 （自己評価）

※『日本語再発見新版』三省堂選書９（1977年発行）所載。

4　質疑応答

問１　言語活動例を具体化する場合の留意点としてどのようなことが考えられるか。

「国語総合」では言語活動例が９例示されている。例えば、「話すこと･聞くこと」に関する指導に当たっての言語活動例「話題を選んで、スピーチや説明などを行うこと。」では、「話題を選んで」ということが前提とされていることに留意する必要があり、学習活動の明確なねらいのもと、生徒が様々な話題の中から、スピーチや説明を行うのに適切なテーマを選び出せるよう配慮することが大切である。

また、「書くこと」に関する指導に当たっての言語活動例「相手や目的に応じて適切な語句を用い、手紙や通知などを書くこと。」では、「相手や目的に応じて適切な語句を用い」ということが前提とされていることに留意する必要がある。手紙や通知は、近況報告的な私信から宣伝を兼ねた通知文まで種類は極めて多様である。だれに対して何のためにその文章を送るのかなど、相手や目的に応じて文章に表現の工夫を凝らすよう指導することが大切である。

このように、言語活動例の具体化に当たっては、単に学習指導要領に示された言語活動を行うということではなく、それぞれ前提とされていることに留意するとともに、指導のねらいや内容と密接に関連させて効果的な学習活動となるよう工夫する必要がある。

問２　国語科として学校図書館をどのように活用していけばよいか。

国語科においては学校図書館を計画的に利用することを通して、読書意欲を喚起し読書力を高めるとともに、学校図書館の諸機能を活用して、情報を活用する能力を養う必要がある。

そのため、学習指導要領に示されている学習活動のすべてにわたって、図書資料はもちろん、音声言語やビデオなどの映像による教材、インターネット上の情報も含めて、生徒の学習と教師の指導に役立つように活用していくことが大切である。

また、自ら学び、自ら考える力を育成するためには、課題探究型の学習活動が不可欠であり、学校図書館で自分が必要とする情報を選択・収集するなどの学習活動を行うことが必要である。

「国語総合」の「話すこと・聞くこと」の言語活動例として、「情報を収集し活用して、報告や発表を行うこと。」、「課題について調べたり考えたりしたことを基にして、話し合いや討論などを行うこと。」などが示されているが、これらの言語活動を行うためには、学校図書館において必要な情報や資料を利用して調べたり、考えたりする学習活動を行うことが大切である。

そのため、学習に必要な資料リストを作成したり、不足している資料は、他の学校図書館や公共図書館などから借りる必要もあることから、国語科として、司書教諭や図書館担当者と緊密な連携を図ることが大切である。また、多種多様なメディアやコンピュータなどの活用を図ることも必要である。